群教セ	G05 － 07
	平27.257集
	図画工作

試行錯誤しながら自分なりに表し方を工夫できる児童の育成

――視点を明確にした資料提示の工夫を通して――

特別研修員　福島　栄典

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

はばたく群馬の指導プランには、群馬県の図画工作科の課題の一つとして「材料の特徴を生かして発想すること」とあり、思いを表現するために材料の特徴を基に発想することが重要であることを示している。

材料の特徴を十分に知ることは、表現の幅を広げることにつながる。今まで経験したことを振り返るのはもちろんのこと、新しい材料に触れた際にその材料の特徴を十分に理解することが必要になる。思いや願いの具現化に向け、どうすれば形や色などをより良いものにできるか試行錯誤しながら表現に取り組むことで、その材料の可能性を発見し、自分らしい表現方法を見いだしていくことができる。その際、どこをどのように工夫するのかといった視点を意識することで、試行錯誤を充実させ、より自分の意図に合った表現を追求できるようになると考え、このテーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図

２　授業改善に向けた手立て

本研究において、より意識的に試行錯誤できるようにするために視点を絞り、資料の内容と提示方法を工夫することを手立てとし、以下のとおり具体化した。

⑴ 題材「糸のこのドライブ」（第５学年）

糸のこを使ってベニヤ板を自由な形に切り抜いてできた木片を組み合わせ、彩色し立体作品を製作するものである。表現する際、組立て方を視点に児童が自らポイントを見いだすことができるように、以下のとおり手立てを具現化した。このことにより、より意識的に試行錯誤を行うことができると考える。

①資料の視点を「組立て方の工夫」に絞る。

参考作品の提示は有効な手立てであるが、ただ提示した参考作品を見るだけで自己完結してしまい、自分なりに工夫する姿に結び付かないことが多い。組立て方の工夫に視点を絞ることで工夫できる点を明確にでき、質の高い試行錯誤につながると考えた。

②参考作品から、組立て方を見付け、工夫のポイントとして捉える場を設定する。

数種類の組立て方を組み込んで参考作品を提示し、組立て方を探すよう投げ掛ける。児童が自ら組立て方を見付けることにより、様々な組立て方の工夫ができると考えた。

⑵ 題材「色重ねて、夢広げて」（彫り進み版画の製作）（第５学年）

彫り進み版画はその仕組みを理解することが大変難しい。全く仕組みを理解せず、彫りと刷りを繰り返すことは、思い付きのみの作品になってしまう恐れがある。一版目の色を決める際、手順を意識して色を決めることで、その後の色やデザインも手順を意識して発想を広げていけると考える。さらに、各色を重ねる段階でその都度意識できれば、彫り進み版画の魅力に気付ける児童が増えると考えた。

そこで、手順について意識できるように、以下のように手立てを具体化した。

①「色の重なり」を視点とした参考作品の提示とする。

彫り進み版画のおもしろさは色の重なりである。また、重ねる色を工夫することで、様々なイメージをつくり出すことができる。参考作品を提示しただけでは、そこに描かれる図柄に意識が集中する児童もいるため、色の重なりを意識できるように工夫することとした。

②図柄が同じで、色を重ねる順番が異なる参考作品を見せ、色の順番を考えさせる場を設定する。

色の順番をクイズ形式で考えさせることにより、興味を持って参考作品に触れることができる。またどの色をどの順で刷れば良いのかという部分に意識が向き、色を重ねる順番や重ねる色について工夫をすることができると考える。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　意図を明確にして参考作品を工夫し、工夫点を自ら見付けられるよう提示の仕方を工夫することで、その後の活動で教師の予想を超えた工夫が現れた。発想や構想の視点を明確にして表現の手掛かりを示すことは、試行錯誤を生み、児童が自分なりの工夫を生み出す助けになることが明らかになった。

○　どの色をどのように重ねていくか発想を広げる場面では、なかなか思い付かない児童がいたが、各色を重ねる段階で、使う色や刷る手順を意識できるようにしたことで、常に色の重なりを意識する姿が見られた。同じ手順を繰り返しながら表現する題材では、繰り返しの作業の段階でその都度意識させる点を明確にさせることで、試行錯誤が徐々に質の高いものになっていく。

２　課題

○　発想を広げる視点を与え、その視点の部分で、発想を広げ工夫する児童もいるが、表したいことがはっきりしている児童にとっては、新しい視点を自ら探す姿につながらない場面もあった。

○　児童が生み出した新たな工夫は、相互鑑賞などによって共有することにより、工夫を自分の作品にも生かすことにつながる。多様な発想に結び付けるためには、教師の参考資料だけではなく、相互鑑賞などを行い、相互の発想を交流させることなどと併せて構想する必要がある。

○　導入だけでなく、作品の製作過程に計画的に発想を広げる活動を組み込むことが必要である。

＜授業実践＞

実践１

１　題材名　　「糸のこのドライブ」（第５学年・１学期）

２　本題材及び本時について

本題材はベニヤ板を自由な形に切り抜いてできた木片を組み合わせ、彩色して立体に表すものである。糸のこと初めて出合う児童にとって、木の板を自由な形に切り取れることは、楽しく興味深い活動である。また、切り取った形を思い思いの形に組み立て、色を塗ることにより、何の変哲もない木の板がカラフルな立体に変化していくことは刺激的な体験である。この活動を通して、児童は形のおもしろさを再発見し、色や形の組合せの美しさを味わい、形を基に発想したり色を工夫したりする力を身に付けることができると考える。

本時は全７時間中４時間目の「組み合わせる活動」に当たり、「組立て方の工夫」に視点を絞り以下の手立てを講じた。

本時の研究上の手立て

○　提示する資料の視点を「組立て方の工夫」に絞る。

○　参考作品から、組立て方を見付け、工夫のポイントとしてとらえる場を設定する。

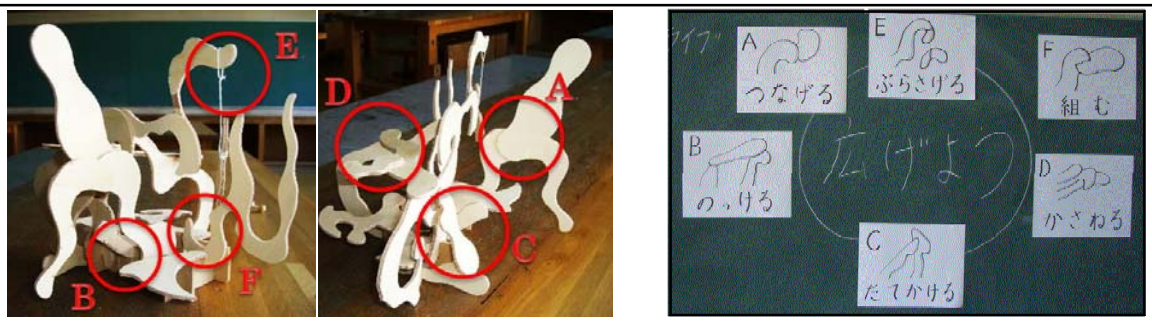
視点を自分で見付けることは、一方的に与えるものと違い意識しやすい。また、表現する上で視点を明確にすることは、質の高い試行錯誤につながると考える。

３　授業の実際

前時までに組み立てるモチーフを糸のこで切ったところ、切りながら木片を組み立て始める児童の様子が見られた。その様子を見ると、図１のようにキットの中に組み込まれた、切り込みの入った板に差し込むだけの組立てに留まり、限られた組立て方の中で試行錯誤をしている様子が見られた。児童が木片の形のおもしろさに着目して自分なりに表し方を工夫できるようにするために、発想や構想の手掛かりが必要である。教師が提示する参考作品は有効な手立てではあるが、ただ提示したのでは見るだけで完結してしまい、組立て方を工夫する姿に結び付かないことが多い。

図１　視点を与える前

自ら組立て方を考え、発展させていく思考にするためには、参考作品の提示の仕方が重要になってくると考える。本時では、数種類の組立て方を意図的に組み込んだ参考作品を提示し、「作品からどんな組立て方が見付けられるかな？」と投げ掛け組立て方を見付けさせた。そして子どもたちの発言を拾って板書に整理し、組立て方のポイントとした。（図2）

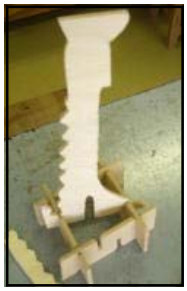


○の部分が意図的に組み入れた組立て方　　児童が見付けたポイントを板書で示す

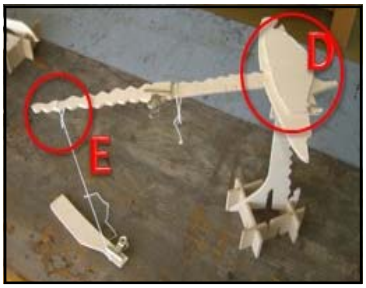
図２　六つの組立て方を組み込んだ参考作品と板書

参考作品には六つの組立て方の工夫を示し、どのような組立て方ができるか、児童たちに見付け出させることによってポイントをつかみ、どのように新しい工夫を生み出そうかという意識に変わっていった。

手立てを講じた結果、「どうやってつなげようかな」や「どうやってぶら下げようかな」、また、「引っかけてみたらどうかな」など、どのような組立て方でおもしろい立体を表現しようかという意識で作品づくりに取り組むようになっていた。図３は変化の様子である。



切った部品を初めは組むだけで考えていた児童。工夫の仕方が分からない様子であった。



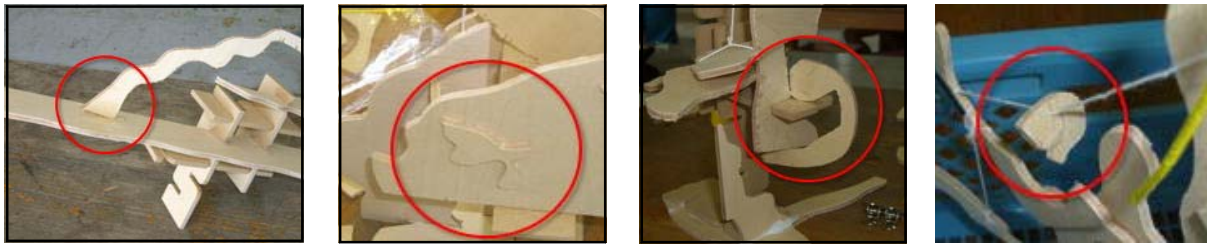
手立てを講じた結果、重ねたり、ぶら下げたりと組立て方のポイントを基に工夫をしていた。

その際、どの部品をどのように重ねるか、また、どのようにぶら下げるかといった組立て方を意識しながら製作していた。

手立てを講じる前　　手立てを講じた後　　※○印は新たに加わった組立て方のポイント

図３　手立てを講じる前と後での作品の変化の様子

視点を絞った結果多くの児童が組立て方を意識しながら製作に取り組んでいた。二つのポイントを取り入れたり、三つ取り入れたりと組立て方の幅が一気に広がっていった。また、導入では考えつかなかった新たな組立て方を考え出した児童も多くいた（図４）。



※○印は新たに加わった組立て方

図４　児童から考え出された新たな組立て方（一部）

途中で友達との作品交流の時間を設け、さらに組立て方の工夫について共有した結果、最終的には一つの作品に多くの組立て方のポイントを確認できた。また、新たに考え出された組立て方も多数確認でき、組立て方を意識し製作に取り組めたことが分かる。以下は組み込まれたポイントの数と人数の推移である。

表１　組み込まれたポイントの数と人数

手立ての後

ポイント一つ・・・１人（４％）	ポイント二つ・・・12人（54％）
ポイント三つ・・・９人（27％）	新たなポイント・・３人（13％）

交流の後

ポイント一つ・・・０人（０％）	ポイント二つ・・・１人（４％）
ポイント三つ以上・21人（96％）	新たなポイント・・11人（50％）

図５　児童の完成作品

４　考察

○　子どもたちにただ参考作品を提示するだけでは、どのように工夫すれば良いのかに気付くことが難しい。参考作品に工夫のポイントが持てるようにすることで、児童が自ら工夫のポイントを意識し、そのポイントを手段として働かせ、実際の作品に広がりを持たせることができることが分かる。参考作品を示すことは有効であるが、工夫のポイントを明確にすることがより発想を広げるために必要であると考える。

○　発想を広げる視点を与え、その視点の部分で、発想を広げ工夫する児童もいるが、表したいことがはっきりしている児童にとっては、新しい視点を探す姿につながらない場面もあった。そのような児童には、製作途中に互いの作品を見合い、組立て方の工夫について交流する場を設定することで、友達の作品から多様な組立て方の工夫を取り入れ、更なる広がりを生むことができると考える。

＜授業実践＞

実践２

１　題材名　　「色重ねて、ゆめ広げて」（第５学年・２学期）

２　本題材及び本時について

本題材で扱う彫り進み版画は、彫刻刀を使って木の版に直線や曲線、面を自由に彫り、色インクで刷る、更に版に彫りを加えて別の色で刷り重ねるというように、彫りと刷りを繰り返して多色版画に表すものである。その中で、彫刻刀の彫りの効果や、刷り重ねることで生まれる色の効果を考え、様々な形や色の組合せを試しながら徐々に自分のイメージを明確にしていくことになる。色の選択と重ねる順序によって作品の雰囲気が異なることを実感を通して理解することは、使う色や刷る順序を工夫し、表したいイメージに近付けていくことに有効であると考え、次のような手立てを考えた。

本時の研究上の手立て

○刷りに取り組む段階で、色の重ね方を工夫させるために、色の重ね方に視点を置いた資料を提示し、色を重ねる順序をクイズ形式にする。

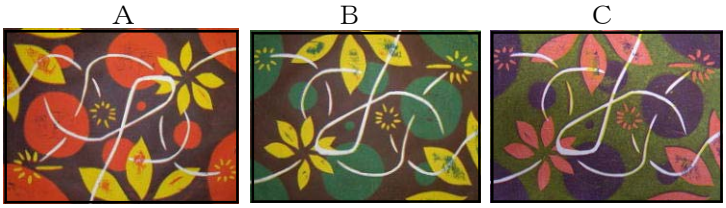
また、この手立ては、一版目、二版目に取り掛かる際に繰り返し行うこととした。そのことにより、刷り重ねるごとに作品のイメージが明確化し、色の扱い方の質が高まり、作品が深まっていくと考える。

３　授業の実際

児童は彫り進み版画の一回目の彫りを終え、一版目を刷る段階である。前時までに、彫り進み版画の仕組みについて学習し、本時でも仕組みについて確認している。ワークシートで、学習したことを自分の言葉で説明させたところ、多くの児童が仕組みを理解していることが分かった。本時では、図柄が同じで色を重ねる順序を変えた作品例を用意し、その中から三つの作品を例示する。参考作品は色を認識しやすいように赤、青、黄の三色の作品とし、児童は黄、赤、青の順に刷った作品はどれかを三択で答える。

図６は参考作品とクイズの様子である。

手順１　資料を提示し「『黄→赤→青』の順に刷られた作品はどれ？」と発問した。

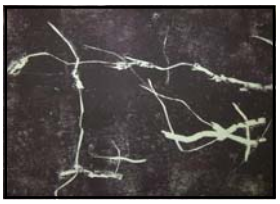


手順２　色の重なりと色の変化についての資料を提示し、色の重なりによる色の違いを意識できるようにした。

手順３　刷る色の順番を変えた他の作例を提示し、色の組合せによって多様な表現ができることを示した。

図６　色の重なりに視点を置いた参考作品とクイズ

クイズの結果、多くの児童が正解を答えていた。Ｂが正解だが、その理由を聞くと「赤と青が重なると紫になるから」、「黄色が見えるから」など色の重なりを意識して答えていた。また、「一番最初に刷った色はどこで分かりましたか」との問いには、口をそろえて「花のところ」と答えたことから、どのように色が重なっていったのかを考えていたことが分かる。その後、６種類の作例を掲示したところ、「すごい！」「あれは、どんな順番なんだろう」などの発言が聞かれ、それぞれの作品の色の重なりを意識しながら作品を見ている児童がほとんどだった。



一色目（紫）

Ｔ：一色目は何色で刷る？
Ｓ：紫で刷りたい。
Ｔ：なぜ？
Ｓ：全体的に少し寒いような感じにして、冬を表現してみたい。
完成をイメージ。

二色目（黄緑）

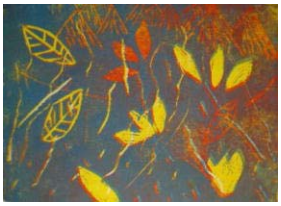
Ｔ：二色目は何色で刷る？
Ｓ：黄緑色で刷りたい。
Ｔ：なぜ？
Ｓ：紫が出るように
二色目も完成をイメージして色を決めている。

図７　イメージを持って一版目を刷っていた児童の作品

図７はある児童の一色目、二色目を決める際の表現と教師とのやりとりの様子である。この児童は、赤、青、黄の三色のインクから刷らず、紫で刷ることを考えた。一色目を刷る際に、「赤・青・黄以外に混色も可」としており、赤と青を混ぜ合わせイメージする色をつくっていた。一版目の自由に彫った線がひび割れや枯れた草を想起させたようで、そこから「寒さ」をイメージして色の重なりを考えていた。このことから、刷る前に色の重なりを意識させたことが、効果的に働いたことが伺える。

二色目（赤）

Ｔ：二色目は何色で刷る？
Ｓ：赤で刷りたい。
Ｔ：なぜ？
Ｓ：一色目を黄色で刷ったら紅葉みたいだったので、秋っぽくしたかった。
完成をイメージ。



三色目（青）

Ｔ：三色目は何色で刷る？
Ｓ：青で刷りたい。
Ｔ：なぜ？
Ｓ：赤とか黄色が目立つようにしたかったから
今までの色の重なりを考えて色を決めている。

図８　イメージを持って二版目を刷っていた児童の作品

また、図８のようなやりとりもあった。この児童は、一色目はとにかく派手な色をイメージしており，赤、青、黄の三色をできるだけ鮮やかに見せる方法を考えていた。参考作品の色を気に入り、その色の重ね方を気にしていた。やはり、色の重なりをしっかり意識し、自分のイメージに近付けるための工夫を考えていることから、色の重なりに目を向けさせる手立てが有効であったことが伺える。

作品①

作品②

作品③

作品④

図９　完成した児童の作品

図９は児童の完成作品である。完成後の児童の感想からは、「秋の紅葉みたいな色ができて良かったです」や「刷る色がうまく重なってきれいだった」、また「色の重なり方で作品の雰囲気が変わるなと思いました」など色の美しさに気付き、彫り進み版画の魅力である色の重なりを最後まで意識していることが伺えた。

４　考察

○　「色の重ね方」に視点を当てた資料をクイズ形式で提示したことで、児童の関心を引き、興味を持って活動に取り組むことにつながった。また、三択にすることで、全員が活動を楽しむことができた。クイズ形式にしたことは、色に関心を持たせる手立てとして有効であった。

○　色を考える場面で、「色の重ね方」に視点を持たせることで、どのように色を重ねると効果的かを意識しながら刷る色を考えており、色の重なりを意識させる上で手立てが有効だったことが分かった。

○　色を重ねるごとにイメージが膨らむ様子が伺え、色の重なりについてその都度意識させることは、作品全体を通して発想の広がりを持たせるためにも効果的に行う必要があると考える。